

日本のMayo Clinicを目指す会**中央検査部が考える“日本の Mayo Clinic を目指す”取り組み**齊藤 妙子¹⁾，吉元 美知子²⁾，田地 功忠³⁾

1) 大学病院 中央検査部 2) 総合医療センター 中央検査部

3) 国際医療センター 中央検査部

1. Mayoクリニックを目指すためにどのようなことをしたら良いと考えたか

中央検査部では、Mayoクリニックを目指すために臨床検査技師として何をすべきか考え、以下の3つの内容を各病院の検査室が担当し、プレゼンテーションを行いました。

(1) 患者・医師・住民の『ニーズ』に応える

病院での臨床検査技師は、検査の依頼を医師から受け、その結果を医師に返却することを業としています。検査結果を含むあらゆる情報は、医師が必要とするだけでなく、患者さんにとって重要な情報です。

また予防医学の側面から、病気の早期発見に臨床検査は欠かせません。地域住民の健康に対する関心は年々高くなり、臨床検査のニーズも増していると考えました。

そこで、患者・医師・住民の『ニーズ』として何が求められており、何ができるか考えてみました。患者さんのニーズは待たされないこと、綺麗で清潔な設備であること、高度な技術を提供してもらうこと、安心・信頼できる検査であることなどです。また、医師のニーズは、必要なタイミングで、必要な情報を的確に受けられること、高度な技術と国際標準を担保する高精度の検査内容であることです。地域の住民は、もっと気楽に検査が受けられること、その検査が安心・信頼できる内容であることなどです。

これらのニーズに応えることが、Mayoクリニックを目指すことに繋がると考え、大学病院が発表しました。

(2) チーム医療 医療の『わ』

チーム医療が叫ばれて10年以上が経過しましたが、2010年厚生労働省のチーム医療の推進に関する検討会以降、メディカルスタッフの活用が促進しました。臨床検査技師はICT、NST、糖尿病療養指導などに加わり病院内で活動するほか、骨髓採取の検体処理や、術中のモニタリング、C-PAP外来でのデータ解析など、医師や看護師の傍らで活動する機会も増えてきました。また、臨床に設置されている血液ガス分析装置や心電計、超音波装置は、医師がいつでも安心して使用できることが必須条件で、機器のメンテナンスや精度

管理に臨床検査技師が深く関わっています。患者さんに最善の医療を提供するために、臨床検査技師はその技術や知識を必要とする、いかなる場所にも出向き、他の医療スタッフと連携することが、Mayoクリニックを目指すことに繋がると考え、総合医療センターが発表しました。

(3) 24時間救急医療を支える

埼玉医科大学病院群3病院は、2次救急、3次救急の差はありますが24時間の救急医療病院です。夜間や日祝日においても通常と同様の安心で満足度の高い医療を提供する必要があります。また、家庭において日常的にセルフチェックを必要としている患者さんもあり、その検査機器の管理も臨床検査技師の役割と捉えています。24時間、常に同じ技術を提供することはかなり難しいことですが、それを志すことがMayoクリニックを目指すうえで不可欠なことと考え、国際医療センターが発表しました。

2. テーマを考える過程ですでに動いていたこと

それぞれのテーマを考える中で、現在取り組んでいることが各テーマと合致し、Mayoクリニックを目指すための業務改善だと気づく事例がありました。

外来迅速検査や緊急検査では医師や患者さんの待ち時間短縮を目標として、毎月TAT調査を行い業務改善委員会にて問題点を上げ、改善する取り組みを実施しています。特に、緊急検査の待ち時間は平均時間だけでなく、30分以内での報告率を提示し、技師の意識を高めています。

大学病院と総合医療センターのNICUには毎日技師が出向し、現場で検査を実施しています。微量な血液を有効に使うことで、患児の採血負担軽減と共に、医師・看護師の業務軽減にもつながると考えています。

救急医療への関与は、継続勤務体制で対応できる検査だけでなく、時には特殊な技術を必要とすることもあります。超緊急輸血の体制を確立し、日当直者でも迷わず迅速に対応できる工夫や、オンコール体制の

強化に努めています。

国際医療センターでは、自宅で使用する凝固検査用の機器について、検査部が窓口となりデータの確認や故障時の対応を実施していますが、今後も継続して患者さんのニーズに応じてゆく必要があります。

3. 集会の準備や参加して動き始めたこと

集会の準備過程では通常とは異なる視点から様々な議論があり、課題に気づくことも多く可能なことから改善が始まりました。

採血室での受付待ちに対応するため、総合医療センターでは案内係を配置し、患者さんからの様々な

要求に答えています。大学病院では受付機を増設し、案内係を配置して長蛇の列を解消しました。

また、メイヨーを目指す会の発表を機に他部門との交流も始まりました。

総合医療センターでは、病棟検体採取時・採取前のトラブルを軽減するため、また検査に関する職種間の業務連携をスムーズにするために看護部と相談しながら、検査部から他職種に向けての勉強会を開催しました。今後も主に新人看護師・研修医を対象に定期的に継続していく予定です。

大学病院では、患者さんを車いすやベッドへ移乗する際、どのように介助をしたら安全で患者さんへの負担が少なくなるのか、また点滴ラインを保護できるのか悩みの種でした。集会で理学療法士さんの発表を聞き、指導してもらいたいという声が上がりました。相談したところ快く引き受けてくださり、10月24日には技師30数名が集まり、手取り足取り指導していただきました。足の向き、支える手の位置、腰掛ける腰の角度や位置など、臨床検査技師にとっては全てが新鮮でした。指導してくださった理学療法士さんは、患者さんのために役立ててほしいと継続した協力も約束してくれました。他職種との交流は必ず患者さんのためになると実感した出来事でした。次回は国際医療センターでの実施が決まっています。



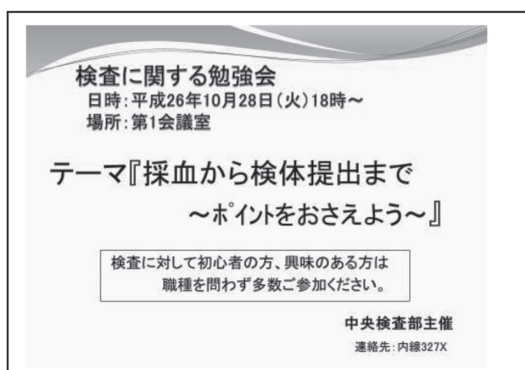
総合医療センター 採血室



大学病院 採血室



大学病院 移乗講習会



総合医療センター 勉強会

4. これから計画しようとしていること

国際医療センターでは、ERや各病棟で実施した血液ガス分析や、生理機能検査の検査結果を電子カルテに取り込む仕組みが確立していますが、大学病院や総合医療センターでも検討を始めました。

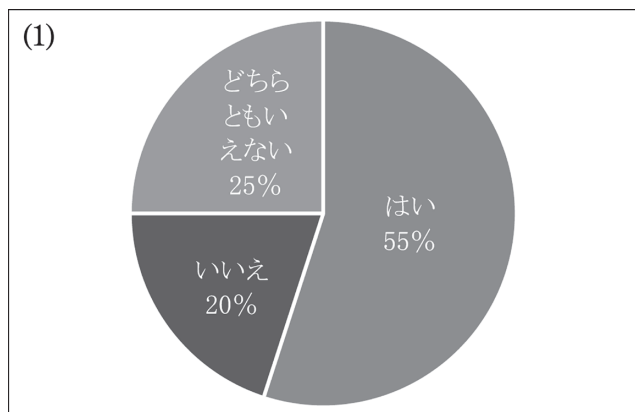
また、国際協力治験を実施する際必要とされる、ISO15189検査室認証についてもできるだけ早く取り組めるよう勉強会を実施する計画です。

採血室や採尿室の整備、検査の説明ができるような環境など、大学病院と総合医療センターでは採血室や検査室のリニューアルを計画しています。

5. 今後どのように活動を進めていこうとしているのか

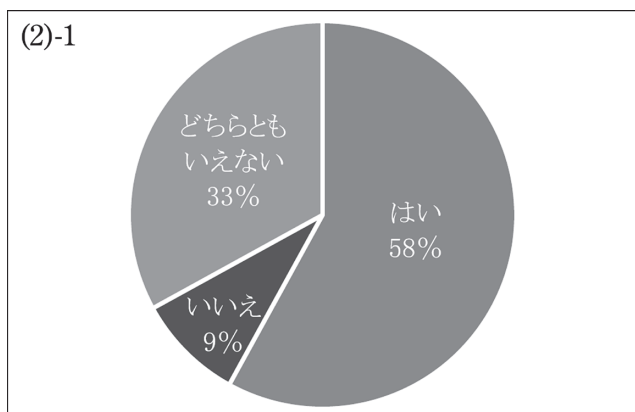
Mayoクリニックを目指す会参加以降、アンケート調査を実施しました。

(1) 日本のMayo Clinicを目指す会の準備段階で心境(仕事への取り組み方や姿勢)の変化はありましたか？

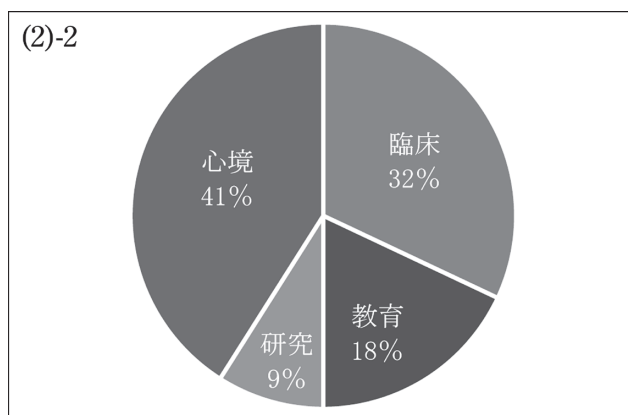


半数は「はい」と回答しており、Mayoクリニックへの理解不足を感じた、自分たちの業務内容の整理・再確認ができた、チームワークの重要性を痛感したと言った意見が寄せられました。

(2)-1日本のMayo Clinicを目指す会に一致団結して取り組み、得たものはありましたか？

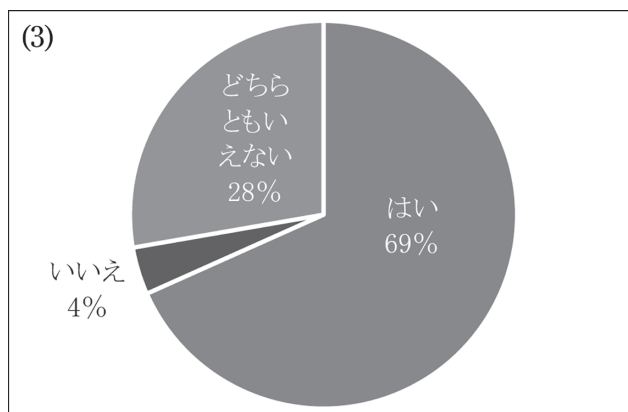


(2)-2どんな分野ですか？



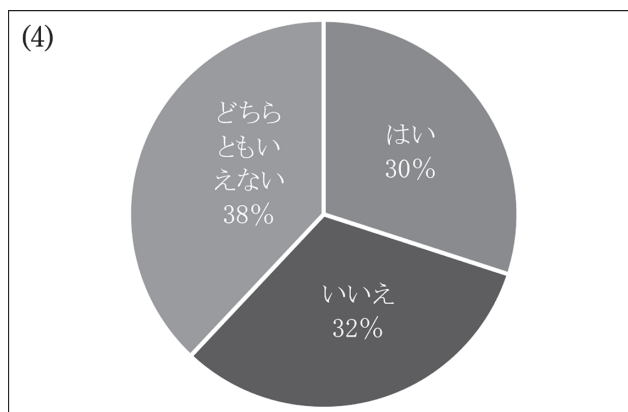
回答者の半数は得たものがあると回答し、その半数は心境面での影響を受けたとしています。Mayoクリニックを目指す会の趣旨が理解できた、他部署の業務を理解する事ができた、病院の皆さんに自分たちの仕事を知ってもらえる事ができたという感想がありました。

(3)全体集会后、日本のMayo Clinicを目指したいと思いましたか？



7割が「はい」と回答し、このような取り組みに対し意欲的な回答が寄せられました。

(4)日本のMayo Clinicを目指す会に参加後、新たな取り組みはありますか？



(3) のアンケート結果と反し「はい」と回答したのは3割にとどまっており、まだ何をしたらよいかわからないと感じているスタッフが多いのではないかと感じました。

Mayo クリニックを目指す姿勢や考える習慣は、残念ながらまだ全スタッフに根付いているとは言えな

い結果と解釈できそうです。今後も継続してこのような機会に触れることや、人の考えを聞くことが重要だと思います。

今後は、物事を選択する際に【効率性】、【経済性】、【有用性】などと共に、必ず【Mayo クリニックたる効果】を加えると良いのではないかと考えています。